

多摩の木、見つけた！ Vol.1

R4.2 発行



「木」と聞いてどんなイメージが思い浮かびますか？

「どこにでもある、身近なもの」、こんなイメージの方が多いのではないのでしょうか。

それもそのはず、**日本の国土の2/3は森林**です。

「コンクリートジャングル」のイメージがある東京都においても、**約4割**を森林が占め、多くが多摩地域西部に存在しています。

この多摩の森林で適切に管理・生産された木材は「**多摩産材**」と呼ばれ、国立競技場や選手村をはじめ、東京の様々な場所に使われています。

是非多くの方に多摩産材も含めた国産木材の良さを知っていただき、活用してほしい・・・！

と、ということで今回は**都の「木の街並み創出事業」の補助金**も活用し、多摩産材を駅舎の改修に使用している**東急電鉄様**にお話を伺ってきました。

※インタビューは新型コロナウイルス感染症対策を十分にとった上で実施しました。

今回お話を伺ったのは・・・

東急電鉄(株) 鉄道事業本部工務部施設保全課
児玉様 (左)・大野様 (右)・塚田様 (WEB参加)
※撮影時のみマスクを外しています



木材を使うことに会社として愛着があった 塚田

当社には戸越銀座駅、旗の台駅、そして今回の長原駅(すべて池上線)と木材を活用した駅が3つあります。

中でも戸越銀座駅は改修前から木造駅舎だったこともあり、駅周辺の方々にとって木材への愛着があったというのがきっかけです。

池上線には情緒ある小さい駅が多いこともあり、街に寄り添うような木材活用を進めていきたいという思いがありました。

大野

戸越銀座駅についても、当初鉄骨造と木造どちらも候補に入れて検討していましたが、最終的には街にしっかり溶け込む、という思いを持って木造駅舎を採用しました。

都の補助金も決断を後押ししてくれました。

それぞれの路線のコンセプトを踏まえ、まちに溶け込む駅を造る

塚田

駅を新設、改修するにあたり、全体のコンセプトとしては「Tokyu Station Pride」があり、その中で路線ごとのキーワードがあります。

例えば池上線は「ヒューマンスケール」、田園都市線は「ワクワクする地下駅体験—Green

UNDER GROUND)」とか。

大野

今回の長原駅のコンセプトは「ちょっとしたくなる ぐらしのまんなか」です。

駅が商店街の真ん中にあるので、路地に並ぶ建物との親近感や、まちに溶け込むような駅舎を意識しました。

木材は軒下部分に使用しているのですが、照明の配置を工夫するなどして、人が駅に引き込まれるようなデザインを意識しました。

木材を使うのは難しい。だからこそお客様の声、表情が嬉しい

児玉

駅舎に木材を使うのが難しいということは、戸越銀座駅、旗の台駅の経験から何となく知っていました。

そのため、木材の生産・加工のスケジュール管理には細心の注意を払うほか、腐食を防止するため、施工業者の方と、旗の台駅の塗料などを参考にしながら、何度も意見交換を重ねました。

改修が終わるまでは大変でしたが、多くの方々のお褒めの言葉をいただき、今となってはやってよかったなど。

大野

1/11(火)に竣工式を実施しましたが、多くの人に足を止めていただきました。

商店街の方からもご好評で、100セット近く用意していたノベルティ(木のコースター、チラシ(街の手帖号外)も30分ほどで配り終わるなど、こちらの予想を上回る結果が出てよかったです。

東京の木



×



木になる リニューアル



駅改札の様子

「多摩産材」の文字が

竣工式の様子

配布したノベルティ等

都の補助制度を活用しつつ自分の街に木を導入する社会的意義を伝えていきたい

大野

私の部署は駅舎等の維持・管理を行うことが主な業務になるので、作る時だけではなく、メンテナンス費用も対象となる制度があったら嬉しいです。

また、それ以外にも木材活用には多くの技術が必要となりますので、そういった知見を学ぶ機会(セミナー等)をいただくとありがたいです。

児玉

駅舎を改修する際、戸越銀座駅のような全面木材で、というケースは実は少なく、特に池上線はそうなのですが、今回の長原駅のような小規模の改修がほとんどです。

こうした小規模建築が対象となる制度があれば、ますます木材を導入しやすくなるかなと。

塚田

ソフト面(子ども達への木育、ワークショップ等)のサポートもお願いしたいです。

現在もいくつかアイデアはあるのですが、費用の点もあり、なかなか実現できていないのが現状です。

大野

駅に多摩産材を使用したことを契機に、利用される方が「駅に木があっていいなあ」で終わらず、自分の街に木材を導入することの社会的意義を知っていただく機会をつくりたい、というのが今日一番お伝えしたいことかもしれません。

【編集後記】

「鉄道会社の街づくりに携わりたかったんです！」と仰っていた大野さんと「街づくりをしたくて入社しました」と語っていた児玉さん。

実際に長原駅をご案内いただいた際、リニューアルした駅とそこに溶け込む商店街の様子を嬉しそうに眺めていた様子がとても印象的でした。

木を植えて、実際に木材として使えるようになるのは約50年後。

だからこそ「今どう使うか」という視点と同時に「将来の人にどう使ってほしいか」という視点を持つ必要があります。

身近な存在であるがゆえに、普段考える機会がなかなかない国産木材ですが、今回の記事を機に「木になって」いただくと幸いです。

私たちが少しずつ、確実に取組を進めていきたいと思います。